

A氏は昨年九月、倫理法人会の会長に就任してから二年目を迎えました。今年度は周年行事を行なう節目の年度でもあり、役職者と共に会を活性化させたいという気概から、年度末の目標を九十二社に設定しました。

その矢先のことです。経営者モーニングセミナーの講話者として訪れた講師の助言から、十一月の周年行事までに会員社数百社へと資格復帰することを決意しました。ところが、計画通りに物事は進まず、会員社数も八十社を切ってしまったのです。

A氏は、思う通りに動いてくれない役職者への不満と不信が募っていきました。それでも、〈百社を達成する意義は必ずある〉と信じて、あきらめませんでした。そして、泣きたい気持ちを抑えながら、目標に向かって前進していったのです。その際、目標達成の意義と計画を多くの役職者に伝えて、共有していきました。「百社」という目標と計画を全役職者が共有し、実行に移していく過程で、〈必ずできる〉と確信に変わった時、会が「組織」として動き始めたのです。やがて、新たな仲間（入会者）を続々と迎え、みごとに期限内に目標を達成し、役職者皆で喜びを分かち合うことが出来たのです。

会一丸となって、普及の好循環を生み出したA氏は、実はPDCAサイクルを取り入れていたのです。PDCAサイクルとは、自己実現やより良い成果を収める手法の一つで、企業では主に品質管理などで活用されています。

このサイクルは計画(Plan)・実行(Do)・評価(Check)・改善(Action)を繰り返すことにより、業務や取り組みなどを改善していくことにあります。



## 目標意識の本気度を高めて 組織として走り始める

ここでの計画は、現状分析力と未来へのイメージ力、それを実現するための目的意識を持つことです。基本的には、目標を達成するには何が必要かを具現化していきます。その計画は、チャレンジ精神を盛り込んで設定し、誰からも共感できるだけの普遍性を持った目標を立てていきます。やるべきことをやるべき人が実行する。その成果を冷静に分析評価し、取り組んでいく過程で、計画にあつていない部分をそぎ落とし、皆と前向きに共有し改善していくことが肝要です。

こうしたことの鍵となるのが、目標なのです。目標とは、目的に到達するための目印であり、行動を進めるにあたって実現・達成を目指す水準です。ここでは、期限や数量を数値化していきます。目標が達成できるかどうかは、目標意識の高さやその本気度、そして行動力とチーム力に関係します。A氏が会長を務める単位倫理法人会も、役職者、会員が「年度目標を達成して、より良い会にしたい」という姿勢が実行に変わり、目標達成という結果へとつながったのです。

「目標意識をはっきりと持つことは、希望の火を掲げることと同じである。希望のあるところには必ず目標があり、目標があるから希望が湧くのだ。来る日も来る日も、何をやってよいか分からないようでは、希望の掲げようもあるまい。目標を具体的に把握することは、理想を明らかに示すことに他ならない。『中略』生きていく限り今はこれをやるのだという目標をしっかりと見極めて、堂々と毎日を働きぬく。これが生きがいというものだ」(『丸山竹秋選集』一度きりの人生です。令和時代の初めての年明けに目標を立てて、果敢に挑戦し、より良い自分を、家庭を、企業を自らの手で築きましょう。